

○要配慮者等への支援

単身高齢者安否確認事例

- 高齢単身者の安否確認については、各自治体で苦慮しているところですが、令和元年台風19号（東日本台風）での長野県の取り組みが「功を奏した」良い事例になるかと思えます。
- 湯井が実際にヒアリングを行った長野県佐久穂町では長野県と消防が一緒になって実施している「災害時支え合いマップ」の取り組みを行っていました。
- <https://www.pref.nagano.lg.jp/chiiki-fukushi/kenko/fukushi/fukushi/sasaeai.html>

- 台風による大雨でレベル3が発令されるタイミングで、消防団は町の全戸に対し避難の呼びかけを行いました。集合住宅の全戸のドアをたたくなど、本当に全戸に対する呼びかけとなりました。
- また、町が用意していた災害時避難行動要支援者名簿とは別に、区ごとに住民支え合いマップを作り、誰が誰を支援するということを決め、避難先だけでなくルートも決めていました。
- マップの中で要支援者は3つの分類（家の色分け）がされています。

①青色：呼びかけだけで移動が可能な世帯

②黄色：手を引いて移動する世帯

③赤色：担いで（車避難）移動する世帯・・・車避難の多くは消防団が担い、一部は福祉避難所を設置した町立の老健施設が担いました。

- 住民で共有する情報は手助けの種類で、**個人情報**は**極力含まれていなく共有しやすい工夫**がされています。
- また、このマップは住民地図を使ったワークショップの中で、住民の同意のもとに作られました。ワークショップに出られていない世帯は白色で記載されています。

- このマップは**毎年更新**されます。
- 佐久穂町は激甚な被害を受けましたが、このマップによる避難支援により早期避難を実現させ、**一人の犠牲者も出ませんでした**。
- この支え合いマップは要支援者の個別避難計画を地図で作ったものであり、マップ作製のプロセスはまさしく地区防災計画の策定です。
- 非常に良い取り組みだと思われます。

研究対象：長野県佐久穂町の概要と被害

出典：障がい者、高齢者の早期避難についての実践事例～長野県佐久穂町立老人介護施設さやかの事例～（地域安全学会2020年度春季研究発表論文）



- 2019年10月11日 上石堂観測点で557mmを観測(11日22時～最大24時間雨量／年間降水量(877mm)の約60%)
- 人的被害(死者・行方不明者)なし
- 全壊12棟 半壊52棟 一部損壊5棟 床下浸水72棟
- 避難所・避難者数 ピーク時10カ所(避難者1,120名 460世帯)
- 道路被害17カ所 橋梁5カ所 林道95カ所

佐久穂町の対応

出典：障がい者、高齢者の早期避難についての実践事例～長野県佐久穂町立老人介護施設さやかの事例～（地域安全学会2020年度春季研究発表論文）

日時		佐久穂町の対応	消防団の対応
日付	時間		
12日	7:40	暴風警報（長野全域）大雨警報（佐久地域）	58区全区における状況調査とフェイスブックによる情報共有
	9:00	第二次警戒発令、福祉避難所開設指示	
	9:03	洪水警報（佐久地域）	
	9:20	災害警戒本部設置	
	9:40	避難所開設の決定、順次避難所へ職員の派遣	
	10:00	防災行政無線で避難所開設を広報	
	13:05	土砂災害警戒情報	
	13:51	避難勧告発令：大日向地区（281世帯、681人）	58区全戸への避難呼びかけ、避難所への同伴、車での輸送
	14:30	避難準備情報発令（大日向地区を除く）：4,051世帯、10,344人	
	15:00	災害対策本部設置	
	15:10	洪水予報（レベル4相当）千曲川：佐久市塩名田、上田市上田	
	15:25	洪水予報発表（千曲川）	
	15:30	大雨特別警報発令（長野県）	
	16:41	避難指示発令：余地地区	
	17:40	避難指示：千曲川沿線の地域 千曲病院：停電中自家発電対応中 その他施設：被害報告なし	
	19:10	余地ダム：越流開始	
	19:15	避難指示：余地川沿線の地域	
	19:34	避難指示：抜井川沿線の地域	
	21:30	大日向地区に停電による断水（281戸、681人）	
23:05	余地地区に停電による断水（135戸、363人）		
13日	2:35	畑ヶ中区 断水（1戸）	



抜井川周辺の被害
2019年10月17日湯井撮影

出典：長野県災害対策本部資料より抜粋

福祉・医療的ケアを支えた避難支援：佐久穂町消防団の対応

出典：障がい者、高齢者の早期避難についての実践事例～長野県佐久穂町立老人介護施設さやか事例～（地域安全学会2020年度春季研究発表論文）


- 災害時住民支え合いマップ
 - 各地区消防団員、区町会、民生委員等により、「地縁関係者の知りえる情報」で作られた名簿
 - 支援内容によるランク分け（**3**ランク）
 - : 声かけで移動 ● : 手を引いて移動 ● : 担いで移動
- 消防団による全戸避難の呼びかけ
 - 全町民への避難の呼びかけと避難支援
- 避難支援（車輦での搬送）
 - 指定避難所への誘導、搬送
 - 福祉避難所・病院への搬送は福祉車両（老健施設さやか）に依頼

災害時住民支え合いマップとは・・・

災害時・緊急時に支援が必要な人に対していつ、だれが、どのように、安否確認や避難行動の支援などをするのか考えるために行う、

- ① みんなで話し合うこと
- ② 話し合った結果を地図に書き込むこと
- ③ 必要な人を支援するための計画づくり

この3つを合わせて
「災害時住民支え合いマップ」といいます。
 (以下では「マップ」と略称します。)




3 マップの対象者の区分けと支援方法(例)

色分け	支援の形態	対象者
赤	災害時・緊急時のほか、日常生活でも支援が必要	日常的に福祉サービスや介助を受けている人や、危険の判断ができない人、情報を得られない人
黄	災害時・緊急時に支援が必要	ひとり暮らし高齢者（日中ひとり暮らし高齢者）や障害者などで、支援があれば避難可能な人
青	災害時・緊急時に、声かけや安否確認が必要	日常生活は自立しているが、災害時・緊急時には配慮したい人
赤枠		区に加入していない人（アパート等で自立の度合いが不明な人など）
⊗	空き家・別荘など	
緑	声かけ・安否確認など助ける例として協力ができる人	

各家庭に配布する調査票の内容

※この調査票には、居住している人全員を記入し、調査票に記入を依頼

家数No	世帯主		年齢	必要な支援（助けてほしいこと）の選択（0-3）			声かけ・安否確認などの協力ができる人（0-3）
	氏名	住所		災害時・緊急時に必要な支援が不要	災害時・緊急時に支援が必要	災害時・緊急時に声かけや安否確認が必要	
1							
2							

マップに色別で表示

外国人居住者支援事例

- 外国人支援というよりは、自分たちで自分たちの防災を考えようという取り組みも散見されてきました。
- 次のスライドは、熊本大学に在籍する外国人留学生により立ち上げられた防災組織です。
- 外国人留学生と日本人学生との交流を通じて、災害時の互いの困りごとと解決策について協働している良い事例だと思われます。
- <https://www.kumamoto-u.ac.jp/daigakujouhou/kouhou/kouhoushi/kumadainow/people2/2017/p180309>

大学情報

学長室から

大学概要

大学基本情報

情報公開

教育情報の公表

取り組み・活動

採用情報

広報

[navigate_next プレスリリース](#)

[navigate_next 広報誌](#)

[navigate_next WEBマガジン
「KUMADAI NOW\(熊大なう。\)」](#)

[navigate_next 2021年度](#)

[navigate_next 2020年度](#)

[navigate_next 2019年度](#)

[navigate_next 2018年度](#)

外国人のための防災を考える留学生グループ[KEEP]

Kumadai Now

Web magazine 熊大なう。

外国人のための防災を考える留学生グループ[KEEP]



始まりは被災経験のシェアから

熊本大学にある、防災や熊本地震からの復興を目的に活動する団体。KEEPもその1つで留学生のグループです。

KEEPのメンバーは5名。全員、2016年の熊本地震で初めて大きな地震を経験しました。代表を務める大学院社会文化科学研究科の

navigate_next 2017年度

navigate_next 2016年度

navigate_next 2015年度

navigate_next 2014年度

navigate_next 2013年度

navigate_next 2012年度

navigate_next 2011年度

navigate_next 熊大ビープル

navigate_next 【ビープル】
2017年度

navigate_next 留学現地リ
ポート：可能性を広げ
たフランスでの留学生
活[フランス ボル
ドー・モンテーニュ大
学]

navigate_next 意外と現代
を感じさせる邦楽の世
界[邦楽部]

navigate_next 九州大会を
突破して、目指せ全国

アンドリュー・ミッチェルさんは、前震も本震も自分の部屋で被災しました。「本震の後は黒髪キャンパスへ避難し、避難所の外で寝ました。そして、友達の友達がいる宮崎へ避難しました」と被災当時を語ります。同じく大学院社会文化学研究科のフランシス・ワルジライさんは「前震のときは寮の隣の駐車場に友達と集まったので、孤独を感じることはありませんでした。本震後は避難所へ行きましたが、日本語の指示は難しかったです」と語ります。薬学部のカイ・ザー・ウィーン・ミンさんは前震後に大江キャンパスへ避難しました。「私はまだ少し日本語がわかる方だけど、中には日本語がわからない留学生もいた。本震のとき、先生が『建物内は危ないから外へ逃げて！』と指示をされたのですが、留学生はなんで逃げるのかがわからずパニックになりました。その後もトイレができずに困りました。どこのトイレが使えるのか表示があるんですが、誰かに尋ねなければわかりませんでした」。このさまざまな経験の違いを知ったことで、今後の防災に役立てていきたいと、同じ授業を受けていた4名が立ち上がったのです。

代表のアンドリュー・ミッチェルさん（イギリス出身）。「イギリスでも地震はありますが、震度1～2程度のものです」



フランシス・ワルジライさん（バブアニューギニア出身）は「日本語の指示がわからず、友達と助け合いながら避難所で過ごしました」と振り返ります。

熊本を飛び出し、神戸、東京、ドイツで情報発信

navigate_next 外国人のための防災を考える留学生グループ[KEEP]

navigate_next 大学からでも始められる音楽[マンドリンクラブ]

navigate_next 地域貢献と環境美化に努める緑の下の力持ち[紫熊祭実行委員会環境部]

navigate_next 熊大生が熊本の観光情報を発信！人とのつながりで成長していく観光サイト [Kumarism]

navigate_next 「認知症になっても安心して暮らせるまちづくり」を目指して[Orange Project]

navigate_next 熊大通信

KEEPの活動は、ワークショップやブログ、Facebookを通じて、自身の経験を情報発信すること。最初のワークショップでは日本人学生と留学生とが自身の被災経験について共有しました。日本人は「外国人は地震発生時にどのような行動をとるべきかがわからない、ということを理解していなかった」と話、一方で外国人は、「日本人は地震に慣れていると思っていたが、実際はどのような行動をとるべきかわかっていない人が多かったということがわかった」といった意見が出ました。大学院社会文化科学研究科のラッセル・ヤンジンさんは「外国人が大変だったことを日本人学生に知ってもらう良い機会になった」と語ります。情報発信の一環として、さまざまな地域で被災経験やKEEPの活動についてプレゼンテーションすることもあります。2017年は1月に神戸、2月に東京で地震体験を話しています。アンドリューさんは留学先のドイツの大学でも行いました。「12月は神戸にいる留学生とワークショップを行い、外国人のための地震政策についてディスカッションしました。2016年に八代の高校生とも同じワークショップを行いました」とアンドリューさん。今後はYouTubeも使って情報発信をしていきたいと意気込みます。

薬学部のカイ・ザー・ウィーン・ミンさん（ミャンマー出身）。「黒髪キャンパスでは英語のアナウンスがあったそうですが、大江キャンパスではありませんでした」



navigate_next 子長記百態談芸

navigate_next 学生による広報活動

navigate_next ソーシャルメディアア
カウント

navigate_next 企業広告

施設状況

自分たちの誤りから学んで防災してほしい

日本人にとって熊本県は地震の少ない安全な場所というイメージがある場所でした。それは外国人にとっても同じで、大地震が起きても「日本＝安全」のイメージは変わらなかったそうです。アンドリューさんもフランスさんも、母国にいる家族に無事を伝えたとき、日本は安全な国のイメージがあるから帰ってくるように、とは言われなかったと話します。一方、カイ・ザーさんは「祖母は『なんですぐ帰ってこないの!?!』と、とても心配していました。でも、両親は帰国しろとは言わず、『一人では危険だから、常に日本人と一緒に行動しなさい』と言いました」と語ります。

しかし、メンバーは「日本＝安全」の固定観念がいけなかったという認識も持っています。「日本は安全な国のイメージがあるし、留学中に地震を経験する人はほとんどいません。私も家族も地震に遭うとは思っていませんでした」。しかし実際は違った、とアンドリューさん。「私たちの考えは誤っていたのです。それでもなお、自分は地震に遭わないと思っている外国人がいます。私たちの誤りから学んでほしいです」と、地震に対する備えの重要性を訴えます。カイ・ザーさんも「私たちが発信をしていくことで、他の地域で今から防災を始めてほしい」と続けます。

今後の活動についてカイ・ザーさんは「外国人のための避難訓練をしたい」と語ります。以前、熊本市国際交流会館との共同企画で外国人のための避難訓練を実施しました。「そのときに3日間生活できるための準備をして避難することや、小学校が避難所になっていることを教えてもらい、ためになった。新しい留学生が来るたびに開催したいと思っています」。

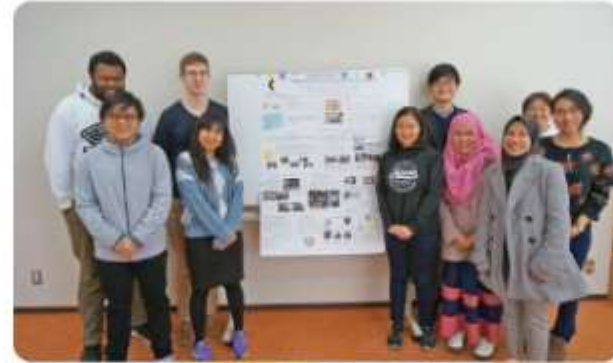
「KEEPのような留学生の防災グループには出会ったことがありません。おそらく他にいないから東京や神戸からもKEEPに声がかかるのだと思います」とアンドリューさん。KEEPは外国人のためだけでなく、日本の防災にも重要な役割を果たす存在になっています。

navigate_next KEEPの活動は [ホームページopen_in_new](#) や [Facebookopen_in_new](#) で紹介しています。



シャイナラッセル・ヤンジンさん
(バプアニューギニア出身)。「避
難所では日本語ばかりで私には難
しく、余計に恐怖が募りました」

八代の高校生たちとワークショップしたときの記念写真。地震が発生したとき、どうしたら外国人を守れるかについて話し合いました。



鹿児島大学で防災について学ぶ留学生たちとも交流しました。

2018年1月27日、アンドリューさんは熊大の工学部百周年記念館で行われた留学生イベントでプレゼンテーションを行いました。



(2018年3月8日掲載)